



『 Heimskringla 』の写本 (13世紀後半に年代固定)。18世紀にオリジナルが火事で焼失し、羊皮紙一葉のみ残存 [出所: <http://handrit.is/>]

る強い関心は、それらに魅せられつつも翻弄されたスノッリという13世紀の一アイスランド人の生きざまと確かに符合するものだ。

▼参考/第12章、第47章

(成川岳大)

写本収集家アウルトニ・マグヌソン

——写本というアイデンティティ

アウルトニ・マグヌソン (Arni Magnusson, 1603-1730) といつても日本でその名前を聞いたことのある人はほとんどいないかもしれない。しかし、アイスランドで1981年から2005年まで用いられていた100クローナ紙幣の肖像画であったといえば、この人物が祖国アイスランドでかなり重要な扱いを受けているのだと想像できるのではないだろうか。ではそのアウルトニ・マグヌソンとはいったい何者なのか。一言で言えばアイスランド語写本の収集家である。

1633年にアイスランドに生まれたこの人物は、現地で神学の基礎を学んだのちデンマークへわたり、コペンハーゲン大学で神学の学位を取得した。その後、コペンハーゲン大学で文

コラム11

小澤 実

献学の教授職を得た。ある貴顕の私設司書としてドイツでの調査より帰国したアウルトニは、王立機密文書館の秘書職につき、王の命令を受けて、1702年より10年間、故郷アイスランドの現地調査をおこなった。当時のアイスランドはデンマーク王国にとって版図の一部でありながら、現地情報については不明な点が多かったからである。1703年のアイスランド初の人口調査もこのアウルトニの成果の一つである。コペンハーゲンに戻ったアウルトニは、母校コペンハーゲン大学の首席司書として、文献の収集に尽力した。アイスランドに渡航する以前にすでに着任していた文献学の教授職も同時にこなしながらである。彼の収集対象は、主としてアイスランド語で書かれた写本であった。彼の写本コレクションは、1728年のコペンハーゲンの大火でかなり失われることになったが、彼の死後大学図書館に寄贈されることに

をまとめた16の「サガ」をまとめた一大集成だ。過去のスカルド詩人の詩を典拠として引きつつ、何世代にもわたる先行する歴史叙述の記述の積み重ねとして成立した集大成的作品であるこの作品とスノッリとの関係は、近現代的な意味での「著者」としてまとめるにはいささか複雑である。それでも、典拠の取捨選択やその解釈、あるいは全体の構成等からは、編纂者側の過去、とりわけ「国王サガ」という作品が代表する文学ジャンルの題材であるノルウェーの王と王家に対する一筋縄ではいかない並々ならぬ執着が浮かび上がってくる。この王権と王家に対する

ランドに返還されることになった。大部分は、アウルトニ・マグヌソンが、18世紀にコペンハーゲンに持ち帰った写本である。

1971年、エッダ詩を収めた『王室写本』が、船でアイスランドに到着した。アイスランドは、アイスランド大学内にコペンハーゲン大学の附属研究所と同じ名前を冠するアウルトニ・マグヌソン研究所を設立し、デンマークから返還された写本の保存と研究をすすめている。たかが写本と思うなかれ、アイスランド人にとっては、その写本に記された文化の痕跡こそ、彼らのアイデンティティなのである。そうでないければアウルトニを紙幣の肖像にするはずではないか。

▼参照／第12章、第33章



1971年4月21日、デンマークからの写本を乗せた船を迎える人々 [出所：http://www.arnastofnun.is/page/frettasafn_frett&detail=1028064]

なった。その3000点近くに上るコレクションは、1956年、コペンハーゲン大学の附属研究所として創設されたアウルトニ・マグヌソン研究所に引き継がれた。

さて、このアウルトニ、たしかに歴史的には重要な人物かもしれない。しかしこの日本で、アウルトニと同様に自国の古い文献資料を収集した^{はなわ}保己^{まきいち}が、誰の目にも触れる紙幣の肖像になるかという点、おそらくそんなことはないだろう。アイスランド語の写本は、アイスランド人にとって特別なのである。

エッダ詩、スカルド詩、アイスランド・サガなどが、孤島であったアイスランドが中世に生み出した誇るべき文化遺産であることは言を俟たない。現在のアイスランド語との類縁性も高く、わたしたちが『枕草子』や『平家物語』を



アイスランドの旧100クローナ紙幣

読むよりもはるかにたやすくアイスランド人は自分たちの古典を読みこなす（韻文は別だが）。そのアイスランド中世文学が、世界各国で翻訳され、親しまれているというのは、彼らにとっても誇りなのである。

1944年のデンマークからの独立が落ち着いた頃、アイスランド議会では一つの議論が起こった。『アイスランド人の古典はアイスランドにあるべきではないのか?』つまり、アウルトニ・マグヌソンらが18世紀に収集してコペンハーゲンに持ち帰り、大学に収められている写本は、アイスランドに戻されるべきだとの議論である。大英博物館にあるエルギン・マールブルをギリシャが返還せよといっているのと同じである。両国間の交渉の末、アイスランド人が執筆したと確認できる写本の大部分が、デンマークよりアイス